

ICOS HP 掲載原稿

JENESYS 2025 気候変動と防災 兵庫コース

気候変動と防災を学ぶ南太平洋大学の学生たち

2026 年 1 月 13 日から 21 日の 8 日間にわたり、クック諸島・ミクロネシア連邦・キリバス・パラオ・マーシャル諸島・バヌアツから南太平洋大学の学生 9 名が来日しました。「気候変動と防災」をテーマに、東京都内および兵庫県への訪問・交流を行いました。オンラインでの参加となった方も 20 名ほどおり、オンライン配信と並行したハイブリット開催でのプログラムとなりました。

都内では、東京スカイツリーや富士山の眺めを楽しんだり、皇居や浅草・秋葉原を散策したり、豊洲を見学したりして、日本の歴史や文化を体験しました。さらに、防災を考える最初のプログラムとして「そなエリア東京」を訪問。クイズや展示を通して学び、時にはメモを取りながら、防災を自分ごととして考えるきっかけを得ることができました。



▲そなエリア東京にてクイズに答える参加者



▲災害対策本部の会議室にて



▲人と防災未来センターにて

その後は新幹線で兵庫県へ移動し、1 月 17 日に阪神・淡路大震災から 31 年を迎える中、兵庫県災害対策センターでは災害対策本部の会議室を見学させていただき、「震災の教訓を活かす～兵庫県の防災・減災対策～」の講義を熱心に学び、意見交換を通して理解を深め、研修の充実したスタートを切ることができました。人と防災未来センターでは大型映像や音響で震災を体感したり、防災パズルや VR 体験で楽しみつつ学ぶ充実した時間を過ごしました。



▲関西学院大学での学校交流



▲兵庫県 OB 会との街歩き



▲「1.17 のつどい」での追悼の様子

学生交流として関西学院大学を訪問させていただきましたが、大変温かく出迎えてくださいました。双方英語のみで進行する防災をテーマとした活発な意見交換だけでなく、参加者による踊りなどのパフォーマンス披露を通して親睦を深めながら、和やかな雰囲気での交流となりました。また 31 年前の震災が起きた日に、青年海外協力隊兵庫県 OB 会の方の案内で震災に関連するスポットを巡りながら街歩きを展開し、追悼の祈りも捧げました。ホームステイでの滞在中はホストファミリーと一緒ににおにぎりを作ったり、日本の家庭料理を堪能。朝食に提供された焼きサバを見て、自国でも魚をよく食べる共通点に親しみを感じた参加者もありました。別れの際にはもっと一緒に過ごしたかったと涙を流す場面もあり、充実した貴重な経験ができました。



▲兵庫県茶道協会による茶道体験



▲ホストファミリーとの集合写真



▲被災地 NGO 協働センター/ CODE 海外災害援助市民センターによるワークショップ

プログラム全体を通じ、参加者は文化や習慣の異なる環境でも積極的に学ぼうと最後まで前向きに取り組む、日本の文化に敬意を払いながら真摯に学ぶ姿が印象的でした。最終報告会では、短い準備期間にもかかわらず、オンライン参加者も含めてスライドを丁寧に作り込み、学んだ内容をしっかりと発表する姿が見られました。

参加者からは、「茶道では、すべての所作に意味があり、一つひとつを大切にしている点が印象的だった。これは災害への備えにも通じる考え方だと感じた。備えは自分のためだけでなく他者のために行うものであり、太平洋地域に根付くコミュニティの価値観とも重なっている。既存の文化や日常の中に防災を取り入れることの大切さを学んだ」といった感想が寄せられました。

また、ホームステイ体験が最も心に残ったと発表する参加者が多く、全行程を通して貴重な交流が実現したことが分かりました。プログラムの最後に行った被災地 NGO 協働センターと CODE 海外災害援助市民センターによる講義を通して、「ワークショップを通して視野が広がった」「事前に備えることの重要性を改めて認識した」といった声も多く聞かれました。さらに、帰国後には各参加者が自分の地域でワークショップを実施し、その重要性を周囲に伝えていく意欲を持っていることも報告されました。



▲姫路城での集合写真



▲スーパーバイザーによる総括



▲最終報告会での発表の様子

参加者はそれぞれ異なる地域に暮らしているため、最後は涙涙の別れとなりました。学生からは、「今回の日本での経験は一生忘れられない」「日本は本当に素晴らしい国だ」「必ずまた日本に戻ってきたい」「学びの深い充実したプログラムに参加できたことに感謝したい」といった声が聞かれ、日本への親しみや関心をさらに深めた様子がうかがえました。

それぞれの地域に戻った後も、今回の日本での体験や学びを家族や友人、そして SNS を通じて発信し、日本の魅力を広め続けたいと語っていました。